

## 第一生命経済研究所のホームページご紹介

アドレス：<http://group.dai-ichi-life.co.jp/cgi-bin/dlri/top.cgi>（「第一生命経済研究所」で検索可能）  
9月上旬までに上記ホームページに登場したレポートテーマの一例をご紹介します。このほか数多くの詳細な経済分析レポートが掲載されていますので、経済研レポートと合わせてご活用ください。

～日本経済は輸出の増加や夏場の消費不振からの回復で成長率が次第に高まる見通しです。

2007/9/12 「2007・2008年度日本経済見通し（4－6月期GDP 2次速報後改定）」

2007/8/20 「住宅着工の先行きを展望する」

2007/8/20 「実質賃金の均衡水準との乖離について」

掲載カテゴリ：日本経済分析チームによる「日本経済の羅針盤」

～新たな波乱要因に激動する世界のマーケットについてコメントしています。

2007/9/10 「Market Watching Weekly Market Report」（毎週月曜配信）

掲載カテゴリ：畠峰義清の「マーケットウォッチング」

～実体経済と株価の関係から世界経済の先行きについて考察を加えています。

2007/9/3 「先行指標としての株価と実体経済」

掲載カテゴリ：熊野英生の「金融市場の謎を解く」

～注目される米国ほか海外経済の情報をお届けします。

2007/9/14 「海外 経済指標・イベント予定 ” Weekly Global Economy ”」（毎週金曜配信）

掲載カテゴリ：「アジア経済」、桂畑誠治の「米国経済を探る」

### 編集後記

長期投資というより高分配金、高実現益重視の運用が注目を集めている。外債投資、ヘッジファンド、あるいは、超短期売買のデイトレーダー、為替証拠金取引も広い意味で同じだ。低金利の下、世界で「毎期高利回りの運用」を求める資金が動く。投資のテクノロジーを駆使して、投資家の受け取るリターンの姿を希望に合わせることはできるが、巨額の資金を運用するには所詮、株式、債券、貸付などの収益を「種」として使うよりない。また、市場金利を上回る利回りをあげるには、それに見合うリスクの上乗せが不可欠だ。

運用を受託した投資会社などでは、売買が容易な先物を活用することが多い。また収益の多様化を目指し海外に分散投資して為替リスクをとることも多い。商品先物への投資も国際商品ゆえに為替変動を評価額に織り込む。さらに市場や銘柄間の相対価格の歪みをとらえて、収益をこつこつと積み上げる手法もある。信用リスクで巧みに利回りを上積みする方法もある。ただし、小さな収益率を魅力ある数字に拡大するためには、借入金で投資額を膨らませるレバレッジ（てこ）の活用がごく普通に行われている。さて周到に準備された投資ほど、即座にルールどおりポジションを動かすのが鉄則だ。一度資金の避難が始まると、どのファンドもほぼ同時に動き、市場と市場が共鳴するように波紋が広がる。急速にかつ売買が完了するまで。

翻って、日本の株式市場は外国人投資家の売買が過半を占め、活発な株式先物の利用が一日の相場動向に与える影響が大きい。為替変動と株式市場の連動も強く、ファンドの動きには敏感である。時折、突然株式相場が不可解な動きを見せる裏には、往々にして以上のようなファンドのポジション修正がある。高利回り安定収益を求める運用が、結局は伝統的な市場の振れ幅を大きく増幅しているように感じる。（H. U）